

17. 雲仙岳吹越の溶岩

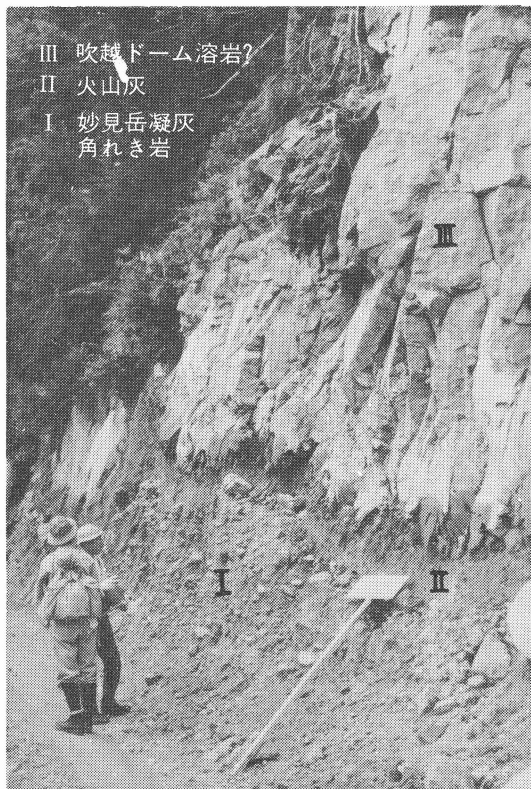
地 域	南高来郡小浜町雲仙
交 通	県営バス 雲仙下車
地形図	肥前小浜・島原 (1/50,000)

雲仙岳は若い火山であるため、中央部付近では溶岩の分布と地形とがほとんど一致しており、谷間はそのまま溶岩の境界となることが多い。しかし細かな点や、古い噴出物のあるところではそのように簡単でないところもある。吹越における露頭はその興味あるもののひとつであろう。

仁田峠循環道路から北へ分岐して田代原へ通ずる道路がある。この分岐点は鞍部となっており、吹越という。吹越の北 600m に妙見岳の急傾斜面を切取った崖がある。これが問題の露頭である。道路面に続く最下部は赤褐色～灰褐色の凝灰角れき岩である。これはゴルフ場（池の原）から吹越へ登って来る道すがらよく見られる妙見岳の噴出物と全く同じである。この上に厚さ数10cmの火山灰層^ちがあって、くぼみとなっている。最上部は灰白色で緻密堅硬な溶岩であり、ずっと上へ続いている。この灰白色の岩は火山灰層を境界として、妙見岳の一般溶岩とは別に流出したものに違いない。

駒田はこの岩質が特に違っていることと、このこぶ状になった微地形から、妙見岳・国見岳の山腹に生じた小さな溶岩ドームであると考えた。このあたりが深い森林で見通しも利かず、航空写真の利用もできないし、ましてこのような大きな露出もなかった時代の着眼としては、全く頭のさがるものがある。

その後雲仙火山の研究者は誰もこの問題に触れていない。足場の悪いところであるが、この露頭の南北・上方を追跡してみると明確



吹越のドーム

九千部岳の頂上から南東へ続く尾根は、2か所で東西方向の断層によって断たれていることが地形からうかがわれる。そのうち南側の断層で吹越の問題のあった崖から約500mの地点では、断層にともなわれる角れきの露出地があったが、今ではセメントされて見えない。

九千部岳の溶岩はしそ輝石含有黒雲母角せん石安山岩、妙見岳、

な解答が得られるであろう。

吹越で思わぬ時間を費したので、これから北へ急ぐことにしよう。道は北へ谷ぞいに通じている。地図をよく見ると気がつくのであるが、この谷の延長は田代原を横切り鳥甲山の東を経て、魚洗川へ続いている。これと平行した谷にも同様なことが見られる。このことはこれらの南北方向の谷の形成後、田代原を東西に貫く千々石断層が生じたという根拠になる。

国見岳のはかんらん石普通輝石しそ輝石含有黒雲母角せん石安山岩とされている。かんらん石の有無だけが区分のきめ手のようであるが、斑晶が大きくルーペを使えばわかるから、じっくり腰をすえて観察するとよい。

やがて田代原に出る。まだ見ぬ人でも地形図をみるとその景観は想像できるだろう。吾妻岳・鳥甲山・舞岳は千々石断層崖の肩に生じた新しい溶岩ドームであるが、庭の築山を見るようにやさしい。吾妻岳への道は短かいが、勾配はやや急である。登り 200m の中間で急に岩質が変る。その上は溶岩であり、下は凝灰岩だから気を付けていると行き過ぎることはない。

このあたりは昼間でもヒグラシが盛んに鳴く。ツツジの季節だと懸崖けんがいに咲くミヤマキリシマがまた格別美しい。美しい景色に見とれて地学の観察を忘れていたが、千々石断層はこの直下を東西に、西は橘湾北岸の唐比から展望台下を経て、田代原を通り、東は島原市折橋を通して有明海までを貫いている。

吾妻岳のすぐ南に見える九千部岳は、よく開析された谷があるのに比べ、その左方の国見岳・妙見岳は谷らしきものが全く無く、老幼の差がよくわかるのである。

吾妻岳の最高部まで足を伸ばしてみると、南側の急峻さにくらべ、北側はうそのような緩かなスロープで、900m に近い高所にいるのを忘れるほどである。

地形図には描かれていないが、吾妻岳の頂上から鉢巻山の山腹を経て、千々石の野田へ出る道がある。日蔭が多いし緑を楽しみながら歩くことができる。

雲仙岳では水のないところが多いのであるが、基底の凝灰角れき岩とそれをおおう溶岩の境には豊富な湧泉がある。どちらかといえばこの山では勾配の急変するところであるから、地質図がなくとも地形図だけで水のあるところを知ることも可能である。

(石井哲夫)